

作業療法学科学生の学年間における学習動機について

小池伸一 山口隆司* 友國由美子**

A Study on Learning Motive of Occupational Therapy Students

Shinichi KOIKE, Ryuji YAMAGUCHI*, Yumiko TOMOKUNI**

要 旨

A 大学作業療法学科学生の1学年から4学年の2007年度162人、2008年度166人を対象とし、学習動機の下位項目関係について横断的・縦断的に分析した。分析の結果、各年度、各学年とも実用・訓練・実用志向が高く、関係・自尊・報酬志向が低い傾向にあり、各年度における学年間では学習動機に差が認められない傾向にあった。さらに、学年進級における比較では1学年から2学年の実用志向で高くなる傾向があったが、他学年進級における他志向では学習動機に差は認められなかった。以上から、A大学作業療法学科学生では①入学から半年の時点ですでに卒業を半年後に控えた学生と同様な学習動機を備えている傾向にあること、②すべての学年で内発的動機付けが外発的動機付けより高い傾向にあることが考えられた。今後、学内外教育において、内発的動機を發揮させ学力向上に繋がるような教育実践の重要性が示唆された。

キーワード：学生、学習動機、内発的動機、外発的動機

Key words：Student, A study on learning motive, Internal generation Motive, External generation motive

緒 言

我々は、現状の学生の学習動機の状況について検証し、その結果を作業療法学科教員による学生への指導や対応の資料とすることを目的に、先の吉備国際大学保健福祉研究所研究紀要第9号において「作業療法学生の学習動機」と題し研究結果を報告した。その概要は以下の通りであった。

「A大学作業療法学科学生の1学年から4学年162人を対象とし、学習動機の調査を行った。その結果、1・2・3学年で学習内容の重要性において重視する傾向と軽視する傾向が認められたが、4学年では学習内容の重要性において重視する傾向と軽視する傾向に有意な差が認められなかった。A大学作業療法学科学生では①学習内容の重要性を重視し

学習の高利性を重要視していない傾向、②内発的動機付けが外発的動機付けより高い傾向にある、③最終学年に向かうほど学習の功利性を求める傾向にあると考えられた。」¹⁾

以上は、2007年度のみという研究期間における横断的な調査結果であり、縦断的に年度経過した調査結果ではなかった。新規に入学した学生、すでに入学し進級していく学生におけるその後の学習動機の変化を追っていくことは、将来、作業療法士となる基盤の一部を作る経過を追うことでもあり、意義深いものと考えられる。

研究目的

先の「作業療法学生の学習動機」では、研究目的

吉備国際大学保健科学部作業療学科
〒716-8508 岡山県高梁市伊賀町8

* 佛教大学医療保健学部作業療学科
〒603-8301 京都市北区紫野北花ノ坊町96

** 岡山医療技術専門学校
〒700-0913 岡山県岡山市大供3-2-18

Department of Occupational Therapy, School of Health Science, KIBI International University
8, Iga-machi, Takahashi-City, Okayama, 716-8508, Japan

* Department of Occupational Therapy, School of Health Sciences, Bukkyo University
96, Kitahananobo-cho, Murasakino, Kita-ku, Kyoto-City, Kyoto, 603-8301, Japan

** Department of Occupational Therapy, Okayama School of Medical Technology
3-2-18, Daiku, Okayama-City, Okayama, 700-0913, Japan

を、後の作業療法教員（教員）による学生への指導や対応として内発的動機につながるような指導の検討に先立ち、現状の学生の学習動機がどのような状況にあるかを検証することを目的とした。それを受け今回の研究では、第一の目的を、新規に入学してくる学生の学習動機の把握と教員による学生への指導や対応の検討における資料とすることとし、第二の目的は、すでに入学し進級していく学生における学習動機の変化を追い、第一の目的同様に教員による学生への指導や対応の検討における資料とすることとした。

なお、学習動機の分析に関して、先の「作業療法学生の学習動機」同様にモデルとして、市川による学習動機の二要因モデル²⁾を援用し分析するものとした。

用語の定義^{2, 3)}

市川^{2, 3)}による用語の定義を使用する。

動機付け：心理学では「やる気」「意欲」を示す。ここでは人間個々の動機の基礎にある基本的欲求とする。

内発的動機づけ：外から与えられる報酬のための手段としてではなく、ある活動すること自体を自己目的的に求める欲求をさす。

外発的動機づけ：活動するにおいて、その代償として物質的報酬、賞賛を求める欲求をさす。

学習動機の二要因モデル（図1）：6つの種類に分類した学習動機、つまり、充実・訓練・実用・関係・自尊・報酬の各志向を構造化したものである。

充実志向：学習自体が楽しく、やっているという充実感を示す動機をさす。

訓練志向：知力をきたえる動機をさす。

実用志向：勉強を仕事や生活に生かすことで、やれば仕事や生活が豊かになる動機である。しかし、勉強しないと困ることから功利性は高くなる。

関係志向：他者につられて勉強する状態で、誰と学ぶかが関心事となる。

自尊志向：プライドを味わえることで功利的傾向がある。

報酬志向：外からの物質的な報酬を意識し、学習する内容自体に興味があるとはいえないものである。

モデルの定義^{2, 3)}

学習動機の二要因モデルは市川^{2, 3)}によって定義づけられたモデルであり、以下にはモデルの詳細について説明を加える。

市川は大学生を対象に調査を行い、回答から学習動機を構成する6つの志向を次元化したものが、これを学習動機の二要因モデルである（図1）。このモデルは2つの次元から成る。1つは横軸方向で、学習による直接的な報酬をどの程度、期待するかを示す。他は縦軸方向の次元で、学習内容をどの程度、

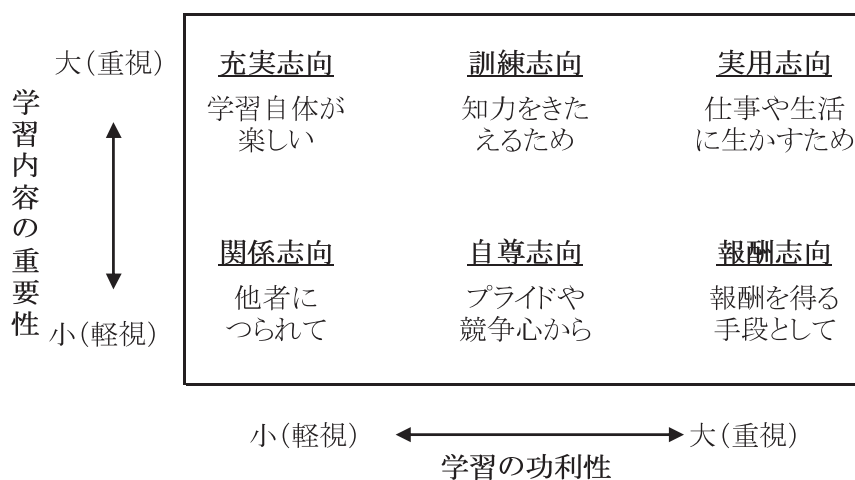


図1 学習動機の二要因モデル

出所：市川伸一（2001）「学ぶ意欲の心理学」PHP 研究所 P48

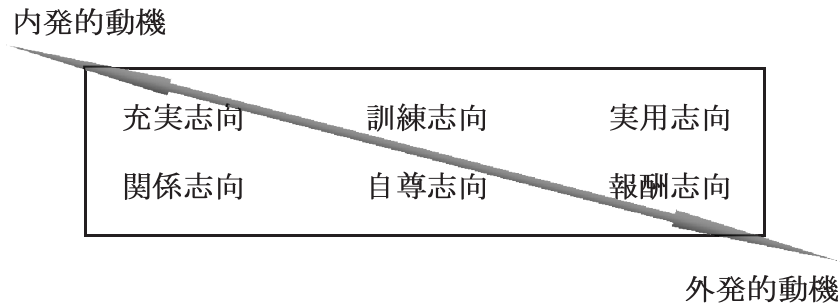


図2 学習動機の二要因モデルと内発的外発的動機の関係

重視しているかを示す。上段に充実志向、訓練志向、実用志向が配置され、下段に関係志向、自尊志向、報酬志向が配置されている。さらに、各動機の例となる表現がされている。この二要因モデルと内発的動機、外発的動機の関係であるが、典型的内発的動機は充実志向で、外発的動機は報酬志向となる。充実志向から報酬志向に至る対角線軸が内発的動機と外発的動機である（図2）。他の動機も対角線軸に投影すると、どの程度、内発的であるか、外発的かをみることができる。

研究方法

1. 対象

対象は2007年度の学生データ（2007年度データ）および2008年度に行った今回の調査データ（2008年度データ）とした。

1) 2007年度データ

2007年度にすでに行ったA大学作業療法学科学生の1学年、2学年、3学年、4学年の学生162人（1学年40人、2学年44人、3学年42人、4学年36人）のデータを対象とした。

2) 2008年度データ

2008年度の調査データも同様にA大学作業療法学科学生とし、1学年、2学年（旧1学年）、3学年（旧2学年）、4学年（旧3学年）の学生157人（1学年40人、2学年30人、3学年47人、4学年40人）を対象とした。

なお、本研究の2008年度の対象学生は研究実施にあたり条件として、研究以外に使用しない、責任をもって管理保管し個人情報の漏洩を防止すること、本報告に際しては個人が特定できないよう十分

配慮すること、研究の目的、研究の方法、公表する際の方法を口頭で説明し、研究に同意の得られた学生とした。

2. 調査期間

1) 2007年度データ

すでに行った2007年11月から2007年12月とした。

2) 2008年度データ

2008年9月から2008年10月とした。

3. 調査方法

市川が学習動機の二要因モデルに基づき、1995年に妥当性を検証している調査表である「学習動機を測定する質問項目」（表1）を用いた。そして、「学習動機を測定する質問項目」に記入の際には無記名としたが学年のみの記載は行い、集合調査とした。

4. 調査表

表1のように、調査表は質問項目の合計が36項目で構成されている。そして、これらの質問項目に対し被検者は1から5の5件法で回答する。採点は各志向の質問項目1項目につき5点を配点し学習動機の下位項目ごとに平均点数を算出する。算出された平均点数が高い志向ほど志向傾向が高いと判断する²⁾。質問項目36項目は学習動機の下位項目である6種類の志向、つまりA：充実志向・B：訓練志向・C：実用志向・D：関係志向・E：自尊志向・F：報酬志向を調べるための質問項目がさらに6種類配置される構成となっている。なお、調査表の回答に際し被検者が各志向を意図的に操作することを避け

表1 実際に使用した学習動機調査

学習動機調査					
あなたの勉強の動機についておたずねします。					
I 質問 : 次の質問が自分によくあてはまれば5に○、まったくあてはまらなければ1に○をしてください。そのあいだは2、3、4 のうちどれかに○をしてください。					
	よくあてはまる				まったくあてはまらない
1	5	4	3	2	1
2	5	4	3	2	1
3	5	4	3	2	1
4	5	4	3	2	1
5	5	4	3	2	1
6	5	4	3	2	1
7	5	4	3	2	1
8	5	4	3	2	1
9	5	4	3	2	1
10	5	4	3	2	1
11	5	4	3	2	1
12	5	4	3	2	1
13	5	4	3	2	1
14	5	4	3	2	1
15	5	4	3	2	1
16	5	4	3	2	1
17	5	4	3	2	1
18	5	4	3	2	1
19	5	4	3	2	1
20	5	4	3	2	1
21	5	4	3	2	1
22	5	4	3	2	1
23	5	4	3	2	1
24	5	4	3	2	1
25	5	4	3	2	1
26	5	4	3	2	1
27	5	4	3	2	1
28	5	4	3	2	1
29	5	4	3	2	1
30	5	4	3	2	1
31	5	4	3	2	1
32	5	4	3	2	1
33	5	4	3	2	1
34	5	4	3	2	1
35	5	4	3	2	1
36	5	4	3	2	1
II 集計 : 質問番号ごとに合計を計算してください					
					合計
A	質問番号	1・7・18・25・29・36			_____
B	質問番号	2・8・17・19・26・35			_____
C	質問番号	3・9・16・20・27・28			_____
D	質問番号	4・10・13・23・24・30			_____
E	質問番号	5・11・14・21・31・34			_____
F	質問番号	6・12・15・22・32・33			_____

出所：図1と同じP54-55を一部改変

※II 集計に示してあるアルファベット文字はA:充実志向、B:訓練志向、C:実用志向、D:関係志向、E:自尊志向、F:報酬志向を表す

※各志向名は被検者には全質問の回答、集計終了後に告げることとした

るために、各志向名の伝達は被検者に対し全質問の回答、集計終了後に行うこととした。

5. 分析方法

1) 2007年度データ

調査表から得られたデータをもとに1学年、2学年、3学年、4学年ごと、学習動機の下位項目である6種類の志向ごとに平均順位を算出した。次に1学年、2学年、3学年、4学年ごとに6種類の志向の間でKruskal Wallis 検定を行った。さらに6種類の志向おのおのにおいて1学年、2学年、3学年、4学年の間で同様にKruskal Wallis 検定を行った。

2) 2008年度データ

2007年度同様に1学年、2学年、3学年、4学年について分析を行った。

3) 2007年度データと2008年度データで学年進級を追って分析を行った。つまり、2007年度の1学年、2学年、3学年と2008年度の2学年、3学年、4学年をそれぞれ対比させ志向ごとにMann-Whitney

U検定により比較するものとした。

なお、以上の全ての検定におけるp値は両側であり、 $P < .05$ を有意とし、すべての統計解析にはSPSS16.0Jを用いた。

研究結果

質問表に回答した学生すべての回答が有効回答であった。分析結果は表2、3、4に示した。

各年度および各学年における6種類の志向間の比較(表2)では、すべてにおいて有意な差が認められた($P < .001$)。つまり、実用志向が最も高く、次いで充実志向、そして訓練志向と続く傾向が極めて多い結果となった。一方、最も低いのが関係志向であり、次に自尊志向、報酬志向と続く傾向という結果であった(表2)。

次に、各年度および各志向ごとにおける各学年間の比較(表3)においては、2007年度の自尊志向で学年によって有意な差が認められ($P < .05$)、自尊志向が4学年では最も高く(平均順位91.13)、1

表2 各年度および各学年ごとにおける各志向間の比較

	各志向	1学年(N=40)			2学年(N=44)			3学年(N=42)			4学年(N=36)		
		平均順位	χ^2 値	p値	平均順位	χ^2 値	p値	平均順位	χ^2 値	p値	平均順位	χ^2 値	p値
2007年度	A: 充実	156.58	95.970	.000	157.45	112.529	.000	165.01	109.426	.000	117.15	68.405	.000
	B: 訓練	119.09			110.97			117.82			71.01		
	C: 実用	196.84			210.66			212.05			159.10		
	D: 関係	72.40			69.30			72.44			71.11		
	E: 自尊	81.89			91.18			103.55			96.84		
	F: 報酬	96.21			87.36			88.13			74.86		
		(N=40)		(N=39)		(N=47)		(N=40)					
2008年度	A: 充実	144.45	78.401	.000	145.13	96.042	.000	183.39	130.023	.000	162.25	105.284	.000
	B: 訓練	108.23			110.12			136.91			118.95		
	C: 実用	197.64			199.88			241.95			198.35		
	D: 関係	88.74			79.67			85.66			69.94		
	E: 自尊	85.04			77.50			99.82			84.71		
	F: 報酬	98.91			92.71			101.27			88.80		

Kruskal Wallis 検定

表3 各年度および各志向ごとにおける各学年間の比較

	学年	A 充実		B 訓練		C 実用		D 関係		E 自尊		F 報酬	
		平均順位	p値	平均順位	p値	平均順位	p値	平均順位	p値	平均順位	p値	平均順位	p値
2007年度	1学年(N=40)	73.84	.094	79.94	.057	71.69	.089	71.95	.238	64.68	.046	77.84	.947
	2学年(N=44)	88.70		87.08		87.58		79.58		80.99		81.63	
	3学年(N=42)	91.50		91.81		92.77		82.10		89.81		82.93	
	4学年(N=36)	69.54		64.39		71.82		93.76		91.13		83.75	
2008年度	1学年(N=40)	73.71	.211	78.88	.478	69.24	.146	94.38	.347	87.08	.592	91.61	.664
	2学年(N=39)	77.12		75.99		87.94		79.99		74.51		79.46	
	3学年(N=47)	89.36		88.54		91.96		83.72		87.37		81.00	
	4学年(N=40)	92.63		89.53		83.50		75.79		84.14		82.26	

Kruskal Wallis Test

表4 年度経過による各学年間の比較

	学年		平均		p値
	1欄	2欄	1欄	2欄	
	2007年度	2008年度	2007年度学年	2008年度学年	
A 充実	1	2	21.0±4.35	21.1±4.70	.679
	2	3	21.9±4.66	22.4±3.81	.705
	3	4	22.4±3.54	22.8±3.83	.608
B 訓練	1	2	18.2±3.43	18.3±3.94	.821
	2	3	18.5±4.29	19.4±4.29	.383
	3	4	19.2±3.92	19.4±4.45	.645
C 実用	1	2	25.0±3.95	26.0±3.38	.042
	2	3	26.0±2.56	26.6±2.89	.271
	3	4	26.3±3.28	25.8±3.28	.678
D 関係	1	2	14.4±4.62	15.6±4.82	.206
	2	3	15.2±3.89	16.1±3.92	.224
	3	4	15.6±4.78	15.3±4.87	.893
E 自尊	1	2	15.1±4.68	15.6±4.89	.772
	2	3	17.0±5.07	16.9±4.99	.994
	3	4	17.9±5.24	16.9±4.89	.285
F 報酬	1	2	16.4±4.22	16.9±3.99	.588
	2	3	16.8±4.29	17.3±3.97	.621
	3	4	16.9±4.49	17.1±4.32	.692
Mann-Whitney U Test			2007年度 1学年 (N=40)・2学年 (N=44)・3学年 (N=42)		
			2008年度 2学年 (N=39)・3学年 (N=47)・4学年 (N=40)		

学年では最も低い（平均順位 64.68）結果となった。各年度および各志向ごとにおける各学年間の比較全体では、先の2007年度の自尊志向外は有意な差が認められなかった（表3）。

最後に、2007年度データと2008年度データの比較結果を表4に示した。実用志向において2007年度の1学年とその学年が進級した2008年度の2学年の間で有意な差が認められた（ $P < .05$ ）が、その他の2007年度データと2008年度データの間では有意な差が認められない結果となった（表4）。

考 察

1. 各年度および各学年ごとにおける各志向間の比較

各年度および各学年における6種類の志向間の比較では、すべてにおいて有意な差が認められた。志向の高い項目の傾向は、実用志向であり、次いで充実志向、そして訓練志向であった。

実用志向は先に述べたように、学習を仕事や生活に生かすことで、やれば仕事や生活が豊かになる動機である。作業療法学科の場合、他学部との相違点の一つに学科入学時にすでに将来の仕事内容が作業療法士という一つに限定されている点にある。作業療法学科の学生は作業療法士なることを目指し、

将来的に必要な知識や技術を学んでいるという動機が実用志向に現れていると考えられた。しかも、将来的に必要な知識や技術を学んでいるという動機は、1学年に入学してから、昨年度および今回の調査実施時期である約半年の時点ではすでに実用志向という動機がある程度備わっているものと考えられた。さらに、1学年時にある程度備わった実用志向という動機はその後4学年においても同様の傾向が認められた。

実用志向に次いで高い傾向にあった志向は、充実志向、訓練志向であり、充実志向は学習自体が楽しく、やっているという充実感を示す動機をさすもので、訓練志向は知力をきたえる動機をさすものである。実用志向と同様に2007年度および2008年度データともにその他の志向と傾向は変わらなかった。充実志向や訓練志向では、2007年度データや今回の調査結果、作業療法学科で毎年定期的に行っている教員による学生の個別面接の結果からも、日々の授業や学習に場合によってかなりの労力が必要であるが、知識や技術を習得していくことに、個人差はあるかもしれないが、充実感を感じていることがデータとして現れているものと考えられた。

一方、実用・充実・訓練の各志向と比較し低い傾

向にあった志向である関係・自尊・報酬の各志向の中でも最も低い傾向にあった志向は関係志向であった。関係志向は他者につられて勉強する状態で、誰と学ぶかが関心ごととなるものである。すでに述べたように、実用・充実の各志向が高いことから、他者が学習を行うから自分も学習をするという他者から誘導されるよりも、個々の学生自身の中に学習動機が強く現れているものと考えられた。また、報酬志向も低い傾向にあった。報酬志向は外からの物質的な報酬を意識し、学習する内容自体に興味があるとはいえないものである。各データ結果から、作業療法学科の学生は、関係志向同様に学生自身より外からの誘導に対して学習するという動機は低いものと考えられた。

2. 各年度および各志向ごとにおける各学年間の比較

各年度および各志向ごとにおける各学年間の比較では2007年度データおよび2008年度データともに学年間で差がない傾向が強く現れた。

この結果は、先に述べた、各年度および各学年ごとにおける各志向間の比較とはほぼ同様であった。学生における学習動機の各志向の傾向は統計学的な有意な差は認められなかったものの、2008年度データ結果からは、充実・訓練・実用の各志向は1学年から4学年にかけ高くなる傾向にあり、逆に関係・自尊・報酬の各志向は低くなる傾向にあった。充実・訓練・実用の各志向は内発的動機が強く、関係・自尊・報酬の各志向は外発的動機の傾向が強い。2007年度データも統計学的な有意な差は認められない傾向が強かったが、内発的動機と外発的動機の傾向が2008年度データと比較し逆であった。年度を追うごとに内発的動機が高くなる傾向も推測された。

3. 年度経過による各学年間の比較

年度経過による各学年間の比較では、2007年度1学年と2008年度2学年の実用志向のみに有意な差が認められ他は有意な差が認められなかった。各年度および各学年ごとにおける各志向間の比較で述べたように、入学から約半年経過した1学年時にすでに4学年で理想と考えられる内発的動機が外発的

動機よりも高く、1学年時の学習動機が持続されている傾向が強いものと考えられた。

4. 今後の課題

昨今、作業療法士国家試験受験資格が与えられる大学の学部学科、養成校は乱立状態である。その煽りを受け、A大学作業療法学科においても入学志願者は年々減少傾向にある。入学志願者の減少は入学学生の学力低下に繋がり、教員間で学力低下を実感している印象は共通認識である。学力低下の共通認識がある一方で、今回の研究結果に示されたように、内発的動機に裏づけされる学ぶ意欲は1学年時にすでに4学年時と同様に持ち合わせている傾向があると考えられる。このことを受け、学生や学生の関係者から教員に対し、1学年時の学生における内発的動機に裏づけられた学ぶ意欲を維持または増幅させることが要求されるものと考えられる。さらに、内発的動機に裏づけられた学ぶ意欲を知識や技術、そして情意態度という学習にいかん反映させることができるかが要求されるものとする。そのために具体的には、教員が認知学習的な知見⁴⁾や認知心理学的な知見⁵⁾を身につけさらに実践していくことが必要と考えられた。

本研究の限界

前回調査の結果を受け、今回は2年間ではあるが縦断的に検証を行った。前回調査の横断的調査と比較し一部異なる結果となったが、調査結果の推移を確認していく上では意義深い結果であったと考えられた。

しかし、前回調査同様に単独の大学の学部学科を限定しており、一般的な見解を得るには、まだなお不十分であるとする。さらに、前回および今回の調査とも単独の調査表のみを使用した結果からの検証であるために、対象学生個々の背景は扱っていない。

以上から、今回の報告をさらに一般的な見解とするためのサンプル、対象学生個々の背景も含んだ情報により検証していくことが必要であると考えられた。

Abstract

In this study, cross-sectional and longitudinal analysis was conducted on motivations for learning. Of all the first-, second-, third-, fourth-year students of the Department of Occupational Therapy, University A, 162 and 166 students participated in the study in 2007 and 2008, respectively. As a result, in both years, all the first-, second-, third-, fourth-year students were more motivated by practical use and training and less motivated by relationship, self-respect and rewards. There was no significant difference between the first-, second-, third-, fourth-year students. In the comparison between 2007 and 2008, the first-year students in 2007 became more motivated by practical use in 2008 but other students did not show change in their motivations. Consequently, it was demonstrated 1) that, already half a year after they entered the university, the students of the Department of Occupational Therapy, University A, had motivations similar to those of the students who would graduate half a year later, and 2) that, with all the first-, second-, third-,

fourth-year students, intrinsic motivations were stronger than extrinsic motivations. In conclusion, it is important both in curricular and extra-curricular activities that educational practices help enhance intrinsic motivations to improve the students' learning.

文 献

- 1 小池伸一, 山口隆司, 狩長弘親 (2008) : 作業療法学生の学習動機. 吉備国際大学保健福祉研究所紀要 9 21 - 26
- 2 市川伸一 (2001) 学ぶ意欲の心理学. PHP 研究所 東京
- 3 市川伸一 (1995) 学習と教育の心理学. 岩波書店 東京
- 4 馬場道夫 松出隆夫 (1987) : 学校教育のための認知学習理論. 共同医書出版 東京
- 5 市川伸一, 佐藤公治 : 認知心理学 5 - 学習と発達. 波多野諠余夫 (編) 東京大学出版会. 1996.